障害者と関わって今考えたこと

飯豊町立飯豊中学校　三年　伊藤　翔太

「私『こんなん』だから、仕方ないじゃないですか。」

僕は幼稚園から小学生までの九年間、障害を持った子と同じクラスでした。彼女は自閉症という障害を持っていて、うまく感情の操作ができず、かんしゃくを起こしてしまうことがありました。そのため、僕達は常に気を遣ったり我慢をしたりしながら生活していました。例えば、ドッジボールをして遊んでいるときも彼女にボールを当てると怒って殴りかかってくるので、ボールを当てないようにしました。鬼ごっこでも、彼女が鬼になった時には、僕達がむりやり鬼にさせられたりもしました。当時は小学生だったので、満足に遊べないことや言いたいことを言えないことにイライラしていましたが、それでも「障害があるから仕方ない。」と思い我慢をしていました。

小学六年生になったある日のことです。彼女が悪いことをしてしかられていた時、

「私『こんなん』だから、仕方ないじゃないですか。」

と言っているのを聞きました。

その言葉を聞いた時、当時の僕は激怒しました。なぜなら、僕達は今までずっと我慢をしてきたからです。それを知った上で、障害を持っているのをいいことに、障害を免罪符のように使っていたことが許せなかったのです。

しかし、今となって考えてみると、その言葉の中には「諦め」が含まれていたのではないかと思います。「仕方ない」の中には、私はどうせみんなと同じようにはできないという意味もあったのでしょう。だから、「みんなと同じようにすること」をあえてしなかったのだと思います。

そう考えると、遊びの中にも「諦め」があったのかもしれません。彼女は運動が得意ではなかったこともあり、したくてもできなかったのでしょう。

これらのことから、僕は、障害を持っているからその行動をしたと考えるのではなく、その人だからその行動をしたと考えるべきだということに気づきました。彼女が運動が得意だったら、あの行動はしなかったと思います。僕達がみんなと同じように彼女と言い合ったり、言いたいことを言ったりできていれば、あの発言は無かったと思います。

一方で、障害があるということを配慮しなかればならない場合もあると思います。やはりその時も、障害があるからこう接しようと思うのではなく、この人だからこうしようと思うべきだと思います。

時々、テレビ番組で、障害者が何かの目標に向かって一生懸命に頑張っている様子を特集したものがあります。その時に、

「この人でも頑張っているんだから、、自分も頑張らなきゃ。」

と言っている人がいましたが、もうその時点でその人のことを見下しているのではないでしょうか。本来であれば、

「頑張っている人がいるから自分も頑張ろう。」となるはずです。前者のように「障害者でさえ」というような考え方は、非常に良くないと思います。障害者を使い、感動や同情を誘おうとするテレビの方針も、あってはならないと思います。障害者だって頑張っていない人もいるし、一般人だって頑張っている人もいます。

障害者も一般人も人間です。障害者と言われる人達は、他人と違うところが分かりやすいだけで、一般人でも、違うところなんてたくさんあります。障害者だけではなく、人種や国籍、性別、年齢にとらわれずに、一人一人を人として考え、一人一人の個性を大切

にしていくことこそ、全員が過ごしやすい社会づくりの一歩ではないでしょうか。